特別展

安城譜代 二

三河本多一族

目次

ごあいさつ……3
目次・凡例……4
第1章　三河の本多一族……5
　第1節　本多一族の系譜……7
　第2節　本多一族の三河来住伝説……11
第2章　家康と本多一族……23
　第1節　城主であった本多家……24
　第2節　本多各家の活躍……30
第3章　要地への配備……53
　第1節　東海地方への移封……55
　第2節　越前藩家老 富正・成重……65
掲載資料一覧……72
参考文献……75
協力者・協力機関一覧……76

凡例

（一）本書は安城市歴史博物館において開催する特別展「安城譜代二三河本多一族」（令和五年九月十六日～十月二十九日開催）の展示図録である。

（二）本書の構成と展示順序は一致しない。

（三）【参考】とした資料は展示しない。

（四）資料名称の後に★を付してあるものは、県・市指定文化財を、★を付してあるものは国指定重要文化財をあらわしている。

（五）一部資料については図録に掲載されていても会期中に展示替え等で展示されていない場合がある。

（六）本図録に掲載した写真は関係諸機関、所蔵者に提供いただき、それ以外の写真は本館が撮影した。

（七）本図録に掲載している地図の海岸線等は現在のものを使用した。

（八）本図録で多用する『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』は、それぞれ『寛永譜』『寛政譜』と略記した。

（九）本図録に差別的な用語が記されている場合があるが、史実に基づいて使用したもので、差別を容認するものではない。

（十）本展示は千田佑香（本館学芸員）が担当した。また本図録の編集は三島一信（同）が行った。執筆は三島と、千田・野上真由美（同）・水谷令子（資料整理専門員）が行った。

第1章

三河の本多一族

本多一族は系譜類に伝えられている事によると、三河を発祥の地としていなく、南北朝より前の鎌倉時代後期に豊後本多（大分県臼杵市と推定）に移住したところから始まったとしている。建武新政後、豊後にいた本多氏は足利尊氏に従い、尾張に所領を獲得し、東海地方と関係を持ったと考えられる。しかし、具体的な三河への来住は伝えられてなく、系図上の一族の広がりから、およそ一五世紀後半には三河に一族を分出していったと思われる。松平氏の勢力が矢作川下流域に伸長するのもこの時期であり、本多家の一部はその頃から関係を持つようになったと推定される。

西三河南部の額田・碧海・幡豆郡に広がった本多一族のうち、後に譜代大名や万石取りの家老となった代表的な家が五家ある。そのうち土井郷（岡崎市）を本拠とした豊後守家が本家筋と推定されている。家康以前にすでに土井郷と土井城に居城し、足利尊氏の御教書写等もこの家に伝えられている事や、徳川家康が自立して間もなく、幡豆郡侵攻の将を務めた事など、豊後守家が早くから活躍できたことからもうかがえる。

その他、徳川四天王の忠勝の祖、蔵前（岡崎市）の中務大輔家や、小川（市内小川町）に住していたとされる正信・正重を輩出した小川の本多家（ここでは以下、「小川本多家」とする）、鬼作左と称された大平（岡崎市）の重次の作左衛門家、宝飯（ほい）郡伊奈（豊川市伊奈町）を本拠とした伊奈本多家が挙げられる。

本章では、本多一族の系譜・系図や、由緒書から徳川家康のもとで活躍する以前の本多一族について紹介する。

1-1　三河関係地図

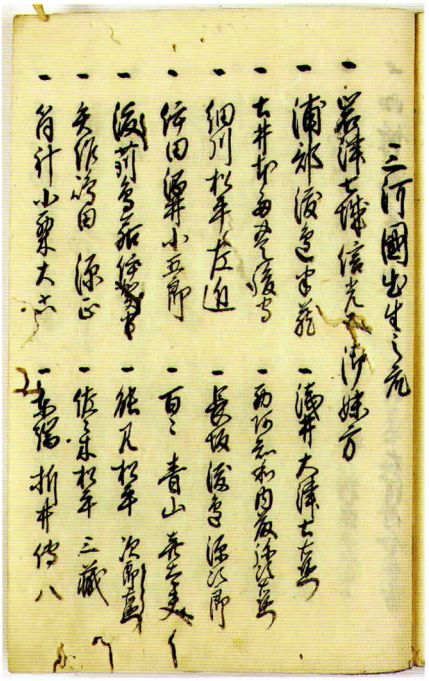
本図は、三河国内における本多各家の関係地をあらわしたものである。

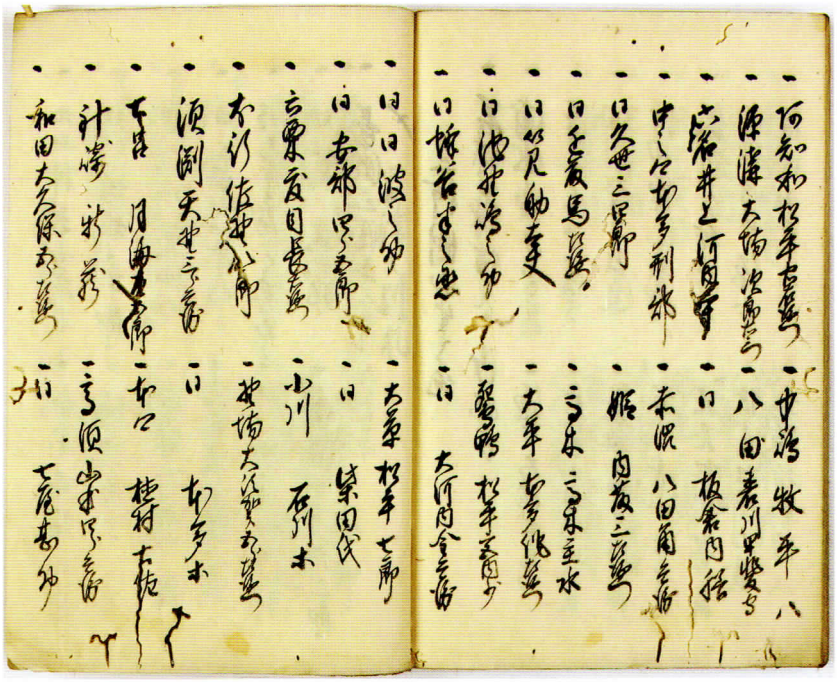
第1節◆本多一族の系譜

本多氏が三河に来住し、一族を分出していったのは、系図や系譜から一五世紀後半頃と思われ、主に西三河南部に広がった。江戸時代後期の三河の地誌類には出生地や古城などの一覧に本多一族が居住していたとする場所がみられるが、他の一族に比べて本多を名乗る家が多く、それに広く散らばっているのが特徴である。

『寛永譜』『寛政譜』の各本多家の系譜では、直接各家を結ぶ系譜はないが、家譜冒頭の注書きに関係が記され、そこでは系図上の繋がりがあったとしている。しかし伊奈本多家のみ、山城愛宕（おたぎ）郡賀茂郷（京都市）に住んでいたとし、豊後本多に移り住んだ由緒を残していない。宝飯郡伊奈（豊川市伊奈町）を本拠としていた伊奈本多家は地域的にも東三河に位置していて、出自が異なるとも考えられる。

また、伊奈本多家を除く四家の中で家康が松平氏当主になる前に有力であった豊後守家が一族の主筋だったと推定されている。





1-2　三河国出生之衆（本館蔵「三河二葉松 巻之三」所収）

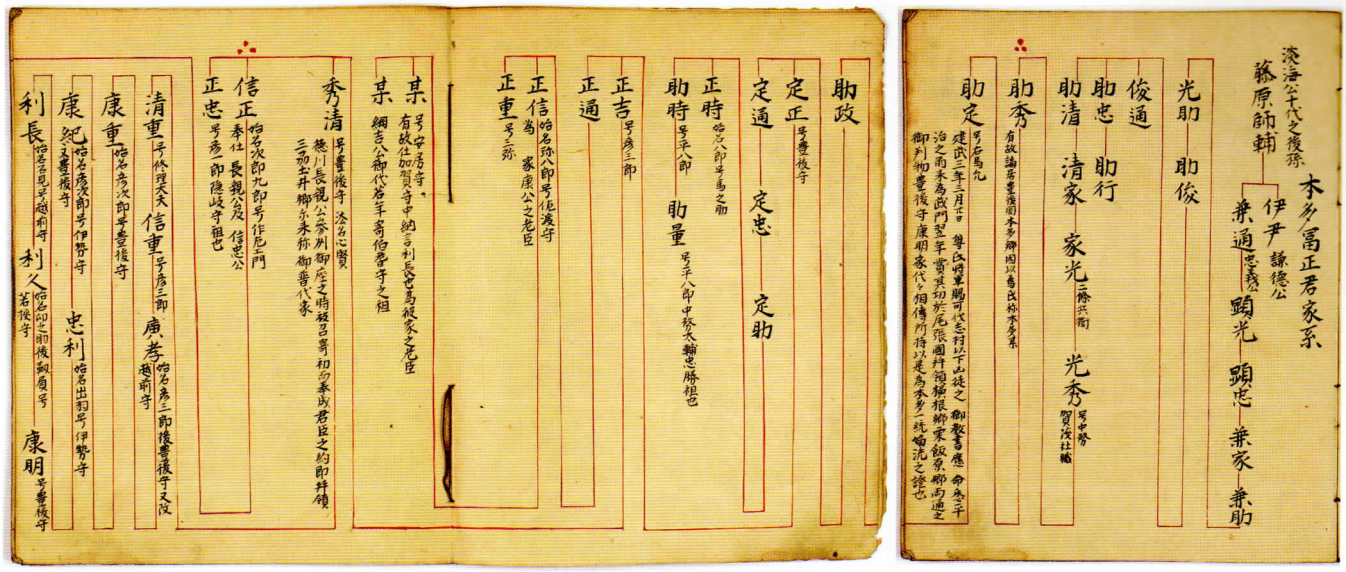
本史料は埋葬地や出生地が一覧で表された部分。額田・幡豆・碧海郡など西三河南部に一族の広がりがみてとれる。

「三河国二葉松」は三河の地誌で、著者は佐野監物。元文５年（1740）の成立。自筆本も残り、多くの写本が残っている。村名（地域名）と武士の名前が書かれたもの。土井本多豊後守、中之郷の本多刑部左衛門、大平の本多作左衛門、野場の本多等（党）などの名が記されている。

1-3　三河国古城覚（本館蔵「三河二葉松 巻之四」所収）

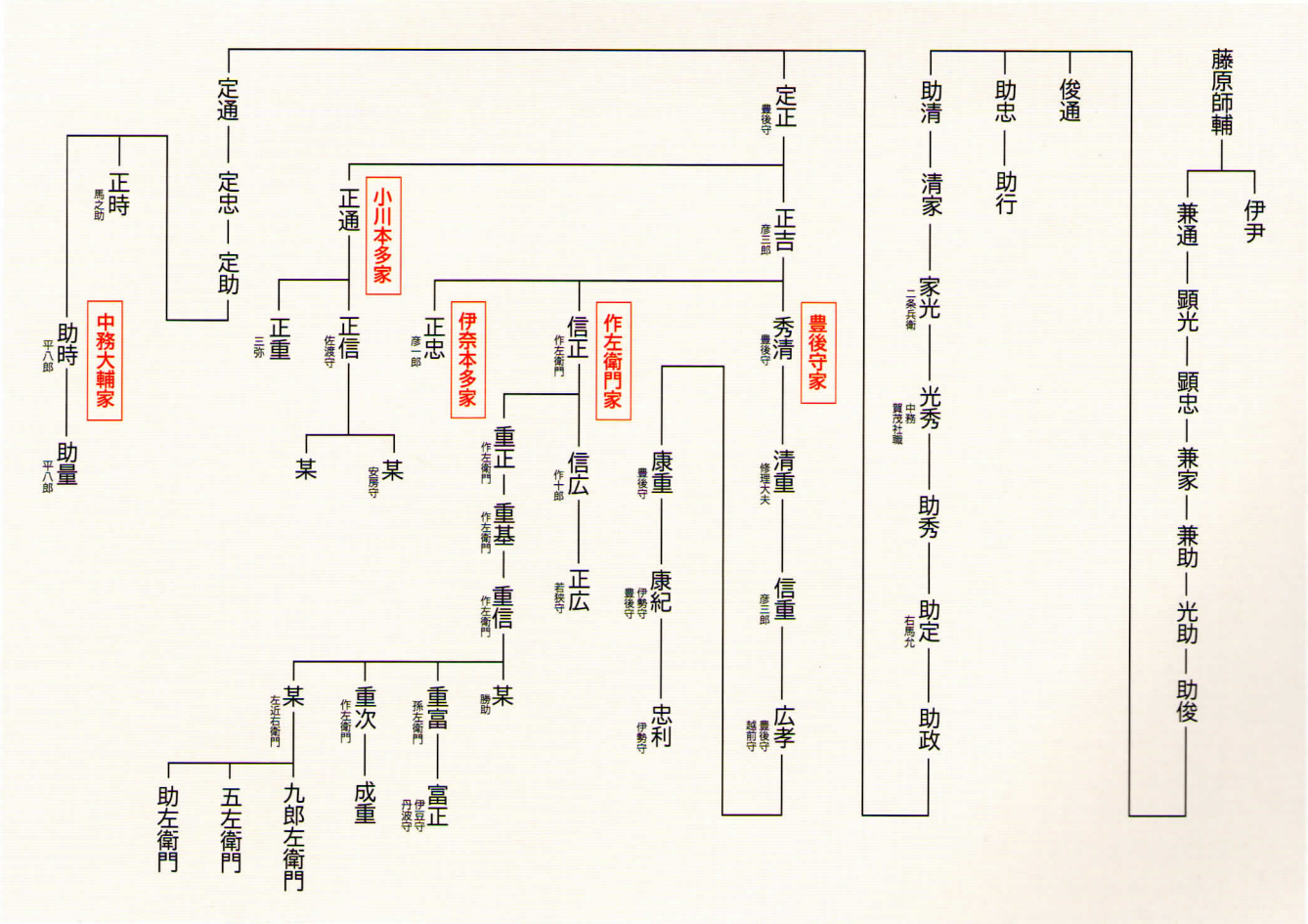
小川村には７か所城があり、本多惣左衛門が松平親忠の婿養子になり、その子孫が本多弥八郎正信・三弥正重としている。しかし、『寛永譜』の正信に連なる譜では曾祖父忠正は西城（にしのじょう）とされていて、正信の項には詳細な記載がない。他の地誌類には小川的場城とされる。

また、宝飯郡伊奈村の上島古城に本多助大夫忠俊、子隼人正忠次がいたとある。



1-4　本多富正君家系（越前市中央図書館蔵佐久間家文書）★

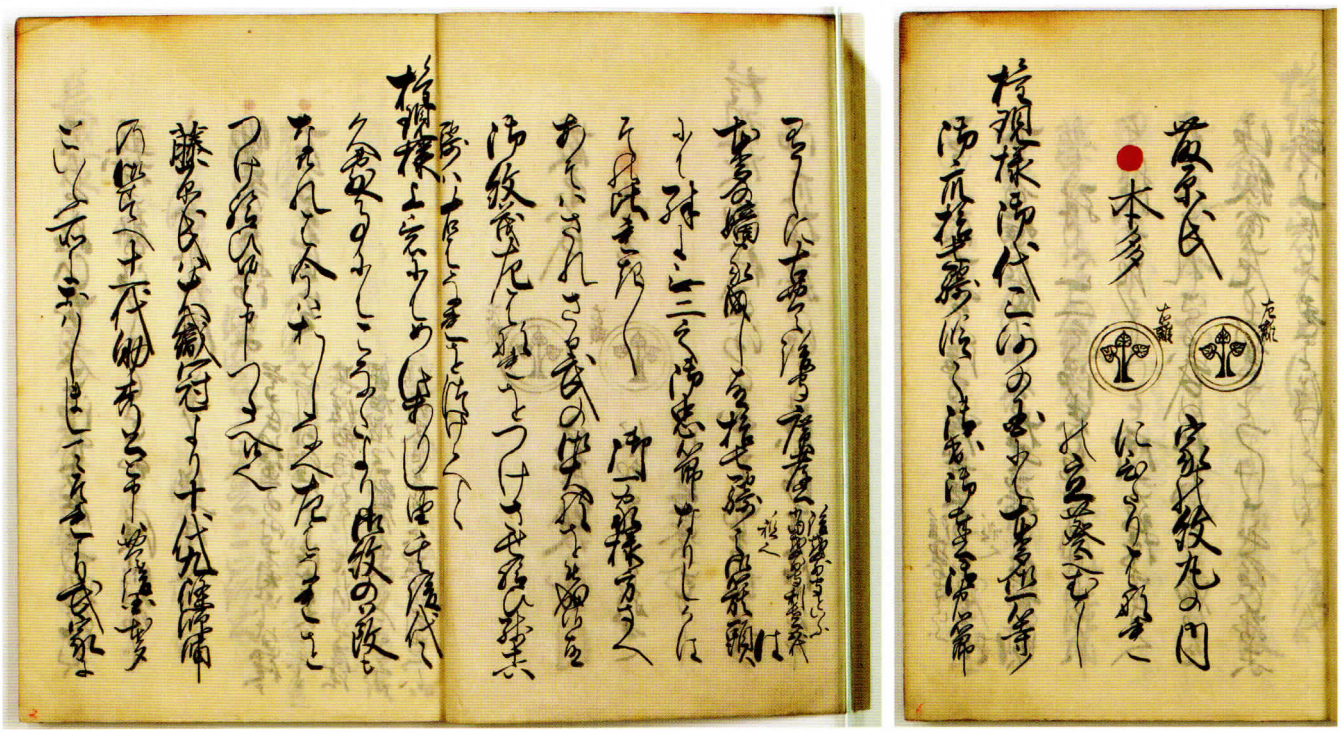
本多５家の分かれを記した系図。豊後守家を本筋として展開している。藤原師輔から始まり、助秀の子助定の時に尾張に来住、助政の子定通から中務大輔家が分かれ、正通から小川本多家が分かれ、秀清から豊後守家、信正から作左衛門家、さらに正忠から伊奈本多家が分かれている。各家の系図の名前とは違うところが各所にみられる。



1-5　本多氏５家系図（史料1-4「本多富正君家系」より作成）

1-6　本多氏葵紋の伝説（本館蔵「藩翰譜 弐」所収）

本史料の縫殿助本多康俊項には葵の家紋についての話が記されている。それによると松平清康による田原城攻めの際、康俊の曾祖父正忠は家に清康を招いて水葵の葉に肴を盛り差し出したとされる。これをみた清康は正忠が先陣を切り戦に勝利したことを吉例とし、正忠の家紋である三つ葵（立葵）を自らの家の家紋としたという。それは隨念寺にある清康の画像の肩衣にみえる立葵紋だともいわれる。本史料ではその他にも伊奈本多家が常に戦いの先陣を切り、その褒美として陣羽織や刀などを賜ったことが挙げられている。

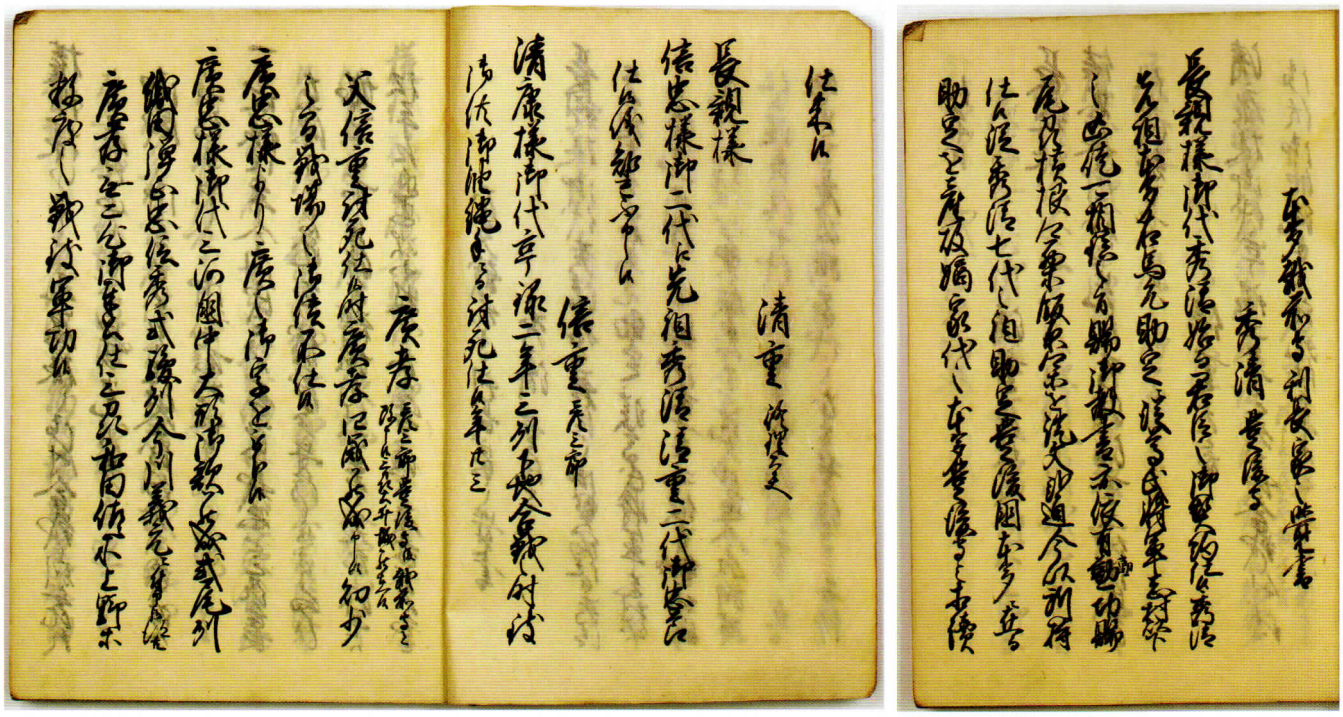


1-7　本多氏立葵の相違（飯山市ふるさと館蔵「後久録抄」所収）

「後久録抄」は豊後守家に伝わった家譜の一つ。冒頭では家紋である立葵紋について、当初は豊後守家が本多17騎の嫡流であり、豊後守家だけが左離れの立葵紋を使用していたという。その後は他家も豊後守家と同様に左離れの立葵紋を使用するようになったと伝えている。ここでいう左離れとは葵の葉が左に2枚ある方をさし、右離れは右に葉が2枚ある方をいう。

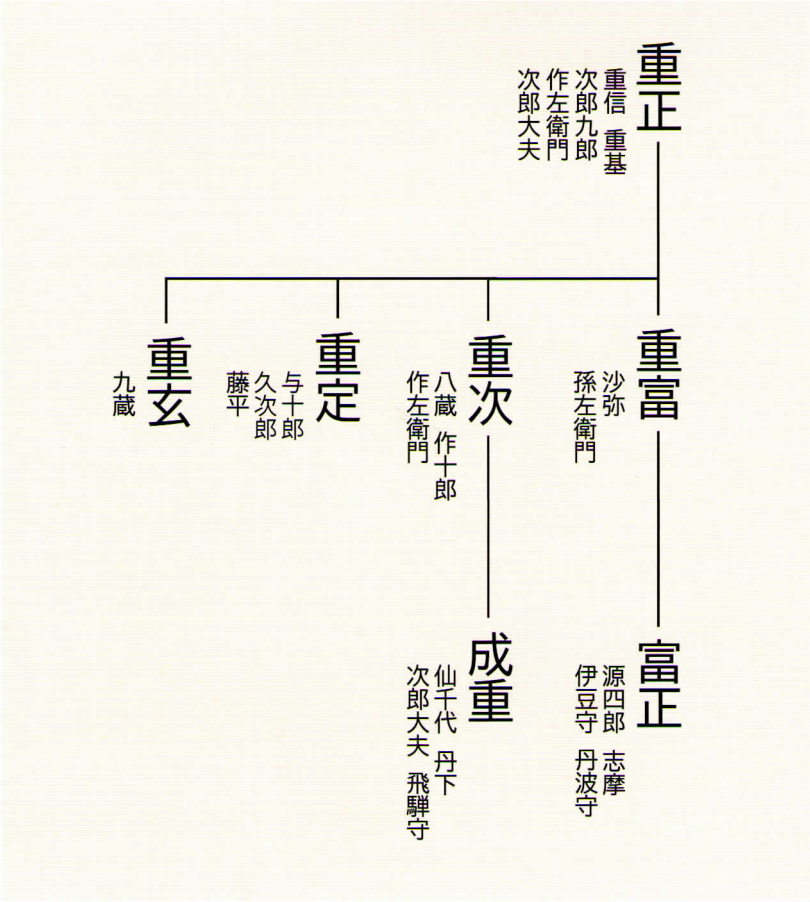
1-8　立葵紋旗指物頭飾り（取手市本願寺蔵）

本多重次の菩提寺である本願寺（茨城県取手市）に伝わる旗指物の頭飾り。三面に本多家の家紋である立葵紋が描かれている。重次所用の言い伝えはなく、後に作左衛門家が同地で旗本に復しており、その頃に使用されたものであろう。



1-14　秀清・清重・信重譜（飯山市ふるさと館蔵浅山家文書「諸系譜書上写」所収）

豊後守家に伝わる系譜。豊後守家では広孝の曾祖父秀清が安城松平家の松平長忠に仕えたことが松平氏との関係の始まりとされる。秀清は先祖の助定に渡された足利尊氏からの御教書を所持し、嫡家として代々本多豊後守を相続しているという。秀清の子清重、その子信重も安城松平家に仕え、信重は清康が東三河へ進出した戦いの際に23歳の若さで討死したとされる。



1-15　作左衛門家系図（『寛政譜』より引用）

❖大平村作左衛門家

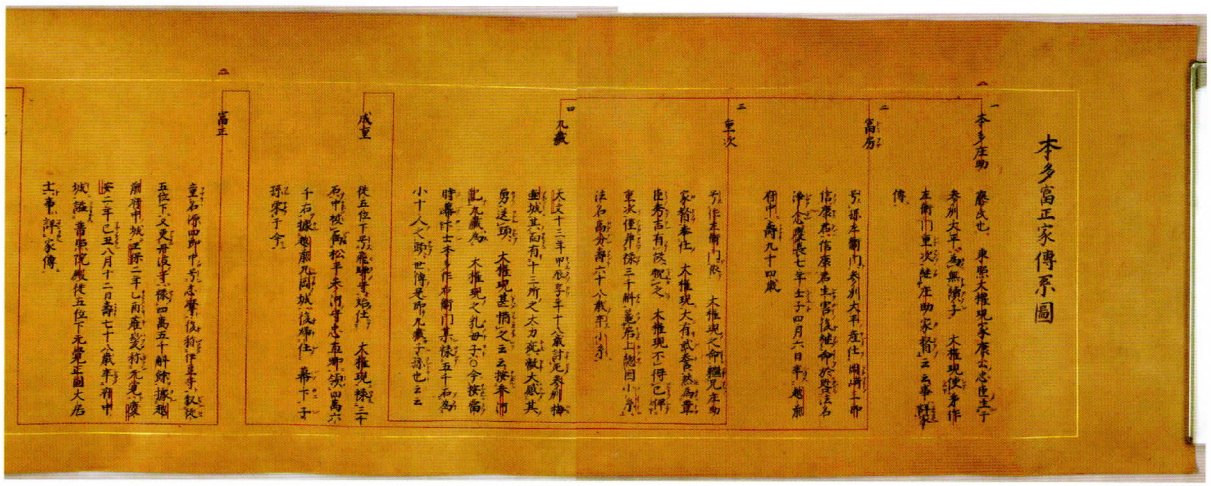
『寛政譜』では正時―信正と分かれたとし、伊奈本多家や中務大輔家に近しい系譜に位置付けている。信正は三河額田郡欠村（岡崎市）に居住したとされ、作左衛門を名乗って松平信忠・清康に仕えた。信正の子重正は三河額田郡大平村（岡崎市）に居を移し、清康・広忠に仕えた。重次兄の重富は信康に仕えたとしている。

一方で旗本となった作左衛門家の後裔の系譜、越前藩家老となった富正系の系譜には先祖の事績を詳細に記し、違う由来等が記されているものが残されている。

1-16　（宝暦８年３月）浅羽三右衛門殿咄之覚（坂井市龍翔博物館蔵「小臣家譜 四」所収）

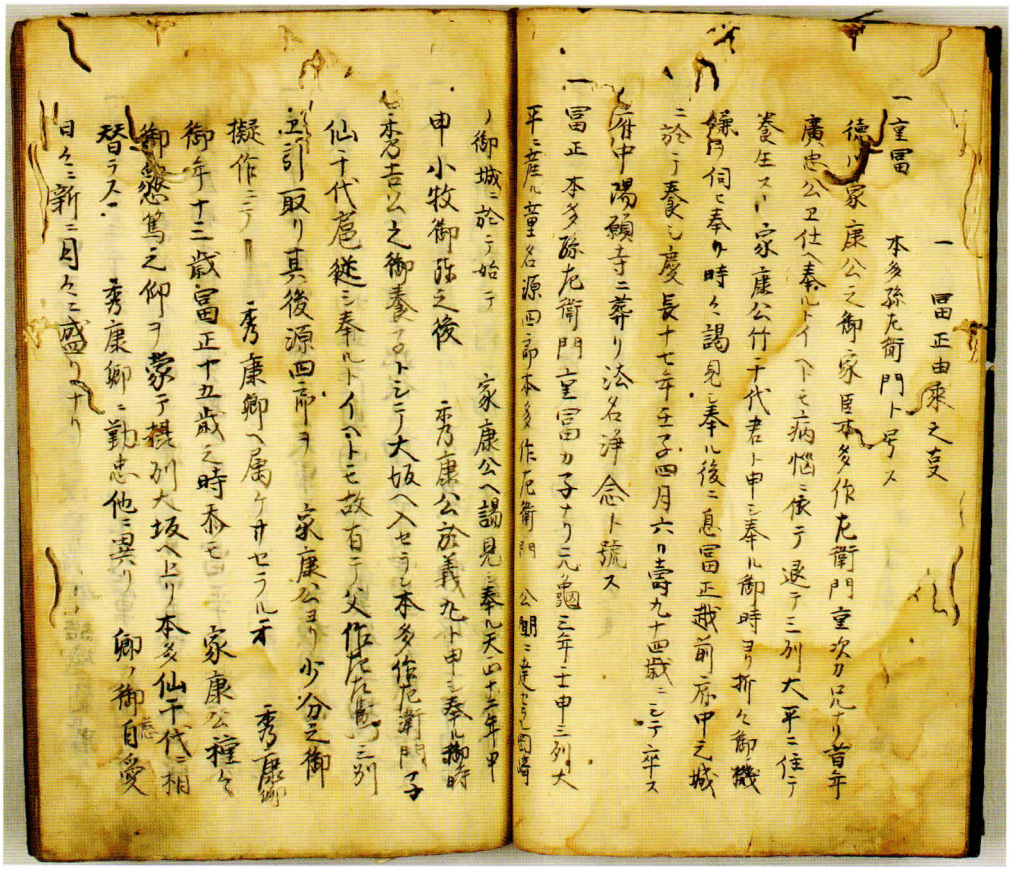
初代丸岡藩主本多成重の四男本多重方家に伝わった家譜。浅羽三右衛門の咄（はなし）として、作左衛門家は三河の出に間違いなく信濃善光寺や武蔵七党との関係を示唆する説は間違っていること、作左衛門家は惣領筋ではなく庶流であるが、信光に従ってからは家老として仕えたなど、出自にまつわる様々な説を記載している。

ただし、浅羽三右衛門は17世紀の系図家で幕府書物奉行の浅羽成儀とされるが、この人物は偽系図作りの祖ともいわれる。



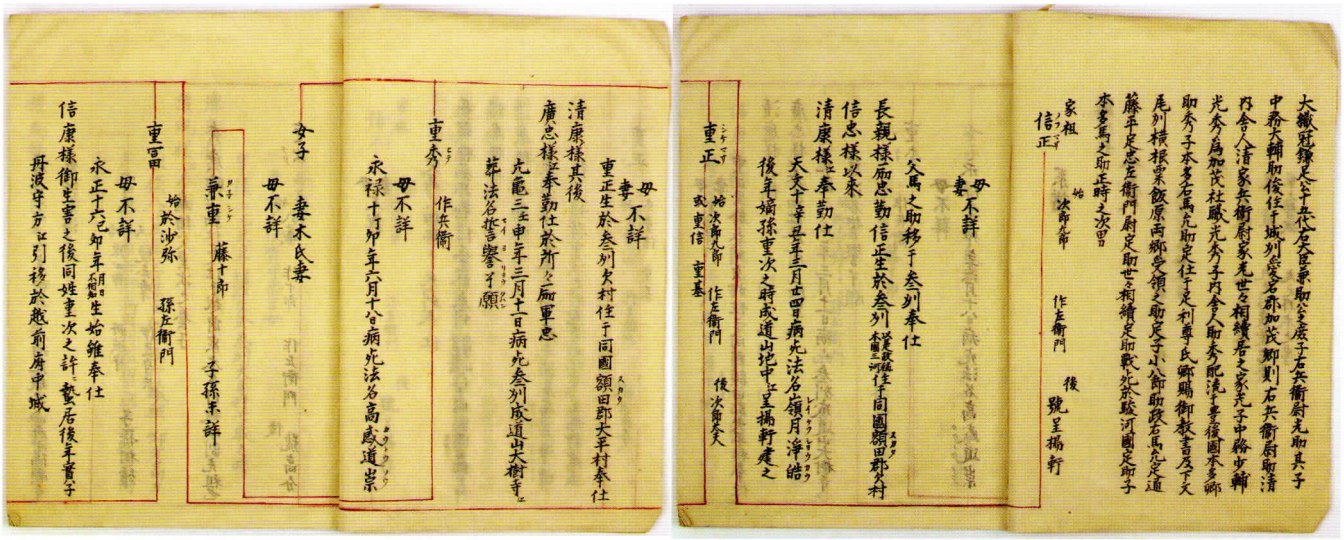
1-17　本多富正家伝系図（越前市中央図書館蔵佐久間家文書）★

庄助を嫡子とし、富房（重富）および重次の兄と位置付けている。ただし、『寛政譜』では庄助の名は存在しない。この家譜では、庄助に子がおらず、家康の命によって重次に家督を継がせたとする。重次を主とする系譜と違い、男子４家が分かれていて、富房－富正の系統を系譜上同等とみる系譜に仕立てている。



1-18　富正公御代々覚書（越前市中央図書館蔵佐久間家文書）★

本多富正の父重富より始まる由緒書。重富は孫左衛門と称し、作左衛門重次の兄に当たる。本来であれば家督を継ぐ立場であった。しかし病弱であったため、家督を重次に譲り、三河大平で養生していたという。晩年は越前府中城主となった富正に従って府中（福井県越前市）に移り、慶長17年（1612）、94歳でその地で死去した。



1-19　寛政11年11月　系譜　御小姓組高木伊勢守組本多作左衛門（坂井市龍翔博物館蔵）

作左衛門家の重次系の系図で、『寛政譜』では重正より始まるが、ここではその父信正を家祖とし、また信正父の馬之助正時の時に三河に移住したと伝えている。前書には賀茂郷の故地など他書にある由緒を様々に加えている。欠村に住み、安城松平家の信忠、清康に仕えたとする。重正は重次の父にあたり、この代に大平に住んだとしている。

第2章

家康と本多一族

家康の自立以前に本多一族は西三河南部に広く分出していった。はじめに家康のもとで活躍したのは豊後守家の広孝で、今川方の東条城（西尾市）攻めに従軍した。

永禄六年（一五六三）末から翌七年春の間に発生した三河一向一揆では、本多一族の多くは真宗門徒（当時の浄土真宗本願寺派）であり、後の一揆の諸書には正信・正重が一揆方に名を連ねている。家康領国内の本多一族は一揆方に与した家が多かったと思われる。豊後守家・中務大輔家・作左衛門家・伊奈本多家などは、宗派を変えて家康方になった由緒を持つ家もあり、一揆で活躍したことで家康の信任を得ることができたと推測される。

家康の東三河への侵攻では、今川氏から離れた伊奈本多家の忠次が家康に従い吉田城（豊橋市）攻めに加わった。また豊後守家の広孝は田原城（田原市）攻めを任され、戦功として同城主となった。同様に中務大輔家の忠勝は、諸伝では永禄九年に騎士五十余騎を付属され、軍団長として甲斐武田氏との攻防戦に出陣したとされる。

本多一族は家康の領国拡大に伴う戦いに先陣を切り軍功を挙げた。また豊臣秀吉と対立した天正十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦い、天正十八年の北条氏攻めの小田原征伐にも従軍する。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは、家康と共に中務大輔家の忠勝・忠朝親子が陣に着き、忠勝が夥しい首級を挙げたことはよく知られる。

また、家康の領国拡大と共に奉行人として作左衛門家の重次や小川本多家の正信が才気をふるった。正信は出奔した石川数正の代わりを担い、家康の側近として仕えた。

2-38　立葵紋旗（大津市膳所藩資料館蔵）

康俊が大坂冬の陣・夏の陣に従軍した際に用いた立葵紋の幟旗。後年、本多神社に神宝として奉納された。

作左衛門家―鬼作左といわれた人物―

本多重次は享禄二年（一五二九）に三河大平（岡崎市）で生まれたとされ、松平清康に七歳の頃より仕えた。作左衛門といわれるが、通称として使われていたのは作左衛門尉である。戦歴では弘治四年（一五五八）の家康の初陣の寺部の戦いから始まり、家康の領国拡大戦のほとんどに加わって戦功を挙げた。三河一向一揆では浄土真宗から改宗して一揆方と戦った。天正三年（一五七五）の長篠の戦いでは七か所の疵を受け、右目を失った。また陣中において「人よせするな 火の用心 お仙泣かすな 馬こやせ かしく」（「小臣家譜」）の一筆ばかりの手紙を妻に送った話が伝わっている。お仙とは、仙千代（後の成重）のことである。

高力清長・本多重次・天野康景（三郎兵衛）を「三河三奉行」とし、「仏の高力 鬼作左 とちへんなき三郎兵衛」と評した事が、鬼作左重次の由来である。この三河三奉行は現在ではなかったとされている。鬼作左と評され、戦による疵の多さなどから武辺者の印象が強い重次だが、実際には家康領国において内政面でも活躍した事が残された史料からうかがえる。

また家康の二男於義伊（後の結城秀康）を出生の頃から重次が世話をしていたという関係から、秀康との関係を強調されるが、これは息子成重（仙千代）や甥の富正が越前藩の家老になったことから生じたものとも考えられる。

豊臣秀吉との関係悪化も取り沙汰されるが、大政所が家康の許へ人質に来た際に、薪を積み、有事には焼殺させようとしていたという話も推測の域を出ないものである。

2-39　作左衛門家年表（重次・成重・富正等）

和暦	西暦	出来事
天文4年	一五三五	重次、清康に仕える。
天文13年	一五四四	重次の弟九蔵重玄、三河梅坪城攻めにて一八歳で死去する。
永禄7年	一五六四	重次、三河一向一揆で戦功を挙げる。
永禄8年3月7日	一五六五	重次、高力清長・天野康景と共に奉行職となり、制法を定め、訟を沙汰するという。
永禄12年3月5日	一五六九	重次、掛川城攻めに従軍する。
元亀3年3月11日	一五七二	重正、死去する。三河大樹寺に葬られる。
元亀3年	一五七二	成重、遠江浜松に生まれる。
元亀3年	一五七二	富正、三河大平に生まれる。童名源四郎。
元亀3年12月22日	一五七二	重次、三方ヶ原の戦いに従軍し、殿を務める。
天正2年	一五七四	重次、家康の命により、秀康（於義伊）を養育する。
天正3年5月21日	一五七五	重次、長篠の戦いに従軍し、軍功を挙げる。またこの際右目を損なう。
天正9年	一五八一	重次、高天神城攻めに従軍し軍功を挙げる。
天正10年	一五八二	重次、家康の命により江尻・久能の両城を守り、国中の政務を司るという。
天正11年	一五八三	成重、家康に仕える。
天正12年12月	一五八四	成重、秀吉の人質となる於義伊に従って京に赴く。
天正13年12月	一五八五	重次、成重を京から呼び戻す。
天正14年	一五八六	富正、京で人質となっている秀康に仕える。
天正14年	一五八六	重次、秀吉母大政所が人質として岡崎に入った時、井伊直政と共に守護する。
天正15年3月	一五八七	富正、九州征伐で秀康に従軍する。
天正18年	一五九〇	重次、小田原攻めに従軍する。
天正18年	一五九〇	富正、奥州平定で秀康に従軍する。
（天正18年）	一五九〇	重次、上総古井戸に三〇〇〇石の所領を与えられる。のち下総相馬郡井野に移される。
文禄元年3月	一五九二	富正、一五〇〇の兵を率いて肥前名護屋に赴く秀康に従軍する。
文禄3年	一五九四	富正、文禄の役終了後、秀康に従って伏見に帰陣する。
慶長元年7月16日	一五九六	重次、六八歳で死去する。下総青柳の本願寺に葬られる。
慶長5年	一六〇〇	成重、関ヶ原の戦いに従軍する。
慶長5年12月28日	一六〇〇	結城秀康、越前六八万石の所領を与えられる。
慶長6年春	一六〇一	富正、源四郎を改め志摩と名乗る。
慶長6年3月20日	一六〇一	富正、従五位下に叙位される。

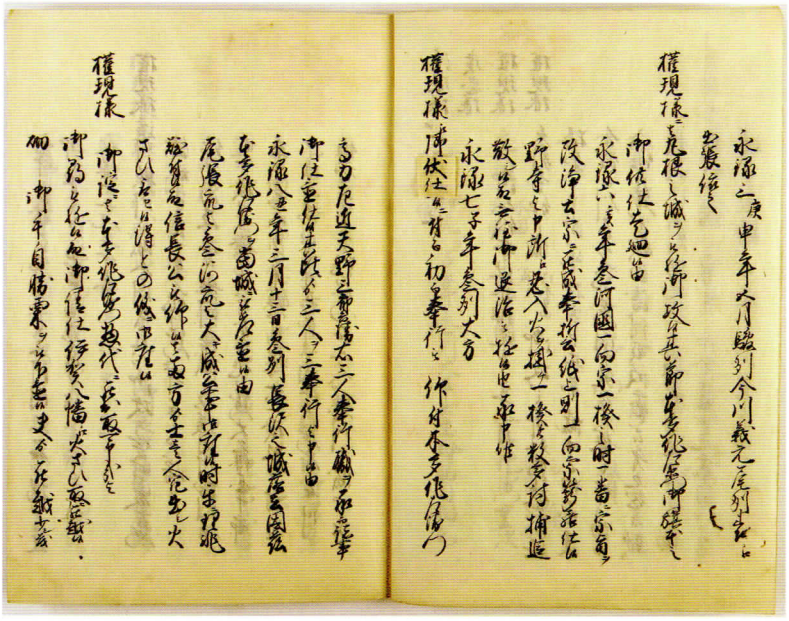
和暦	西暦	出来事
慶長6年5月上旬	一六〇一	富正、秀康の命により、伏見より先立って越前に向かい、北ノ庄城を受け取る。
（慶長6年カ）	一六〇一	富正、越前入国において二万九〇〇〇石を加増され、越前府中城主となる。その後一万石加増で三万九〇〇〇石を領す。
慶長7年10月2日	一六〇二	成重、近江蒲生郡に二〇〇〇石を加増される。
慶長10年	一六〇五	富正、志摩を改め伊豆を名乗る。
慶長11年春	一六〇六	富正、秀康より駿府に派遣され、家康の命により富士山の材木を伐出す。翌年春、沼津に搬出し、家康より饗応を受ける。
慶長12年春	一六〇七	富正、秀康三男吉松を養子とするが、同十四年正月三日に吉松が死去する。
慶長12年閏4月8日	一六〇七	結城秀康、死去する。富正・今村らは家康・秀忠らより殉死を禁止する旨の達しを受ける。
慶長16年3月20日	一六一一	富正、従五位下伊豆守に叙任される。
慶長16年秋	一六一一	松平忠直に秀忠娘勝姫が嫁ぐ。途中府中の富正のもとで婚礼の準備をする。
慶長17年4月6日	一六一二	重富、九四歳で死去する。
慶長17年10月20日	一六一二	松平忠直、久世但馬を誅殺する（久世騒動）。
慶長18年5月19日	一六一三	成重、三万七〇〇〇石を加増され、四万石で丸岡城に在城し、忠直の家老となる。
慶長19年4月8日	一六一四	秀忠より本多成重・富正に松平忠直の後見となるよう命じられる。
慶長19年12月4日	一六一四	松平忠直の軍勢、大坂城真田丸への抜け駆けをする。
慶長20年4月上旬	一六一五	家康・秀忠、京都伏見に着陣する。
慶長20年閏6月19日	一六一五	成重、従五位下飛騨守に叙任される。
元和9年3月15日	一六二三	松平忠直、豊後大分郡萩原へ配流される。
元和9年7月13日	一六二三	松平忠昌、越前入部。
元和9年	一六二三	富正、加増されて四万五二八二石を領する。
寛永元年	一六二四	成重、六三〇〇石を加増され、四万六三〇〇石で初代丸岡藩主となる。
寛永3年9月6日	一六二六	富正、将軍家光の上洛で、越前藩主松平忠昌に属して上洛する。
寛永9年正月24日	一六三二	秀忠死去、諸大名と同じく富正も石灯籠を増上寺に寄進する。
正保2年5月	一六四五	成重、致仕する。
正保4年6月23日	一六四七	成重、七六歳で死去する。越前の本光院に葬られる。
慶安2年8月12日	一六四九	富正、府中城にて七八歳で死去。
慶安2年	一六四九	昌長、父富正の家督四万石、府中城を継ぐ。

2-40　【参考】本多重次画像（個人蔵）

本多重次を描いた肖像画で、寛政７年（1795）に重次の没後二百回忌にあたって作成されたもの。なお重次の菩提寺である本願寺には昭和10年（1935）に製作された同画の写しがある。

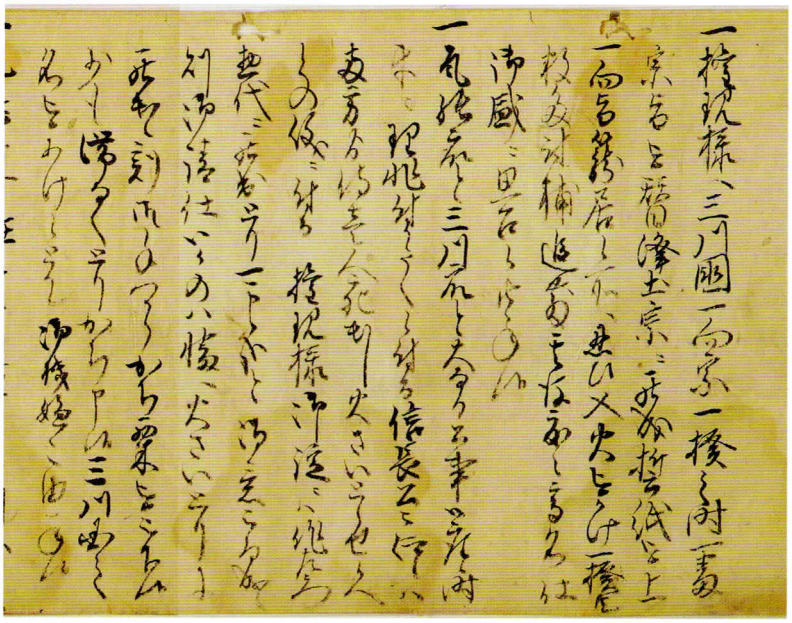
2-41　本多作左衛門由緒書（国立歴史民俗博物館蔵本多家資料）

作左衛門家の由緒書の冒頭部分。初代・２代の作左衛門から始まり、３代重次の由緒が書かれている。重次ははじめ八蔵を名乗り、７歳の時に清康に仕え、その後家康の初陣の寺部の戦いに加わり、首２級の戦功を挙げた。また弟の九蔵（重玄）はこの戦いで討死したとする。



2-42　三河一向一揆で本證寺に火をかける（国立歴史民俗博物館蔵本多家資料「寛政八年六月 本多作左衛門家先祖書」所収）

永禄６年（1563）年末から始まる一揆に対して、一番に宗旨替えをし、一揆方の籠る野寺本證寺に忍び入って火をかけ、多くの一揆方を追捕して討ち取った事績が記載されている。



2-43　織田方との争論で火起請の惣代を務める（国立歴史民俗博物館蔵本多家資料「寛永十八年 御由緒書」所収）

尾張の織田信長の配下と家康の配下の間で争いが起き、信長はその理非を神判に求めた。「火さい」は火誓（かせい）のことで、火で熱した鉄片や鉄棒を持って神棚まで運び火傷の有無で罪の有無を判断する中世の裁判法である。

伊賀八幡宮で行われ、家康は勝栗を与え、重次に代表を命じた。重次はこれに勝ち、三河の名を挙げたと伝えている。

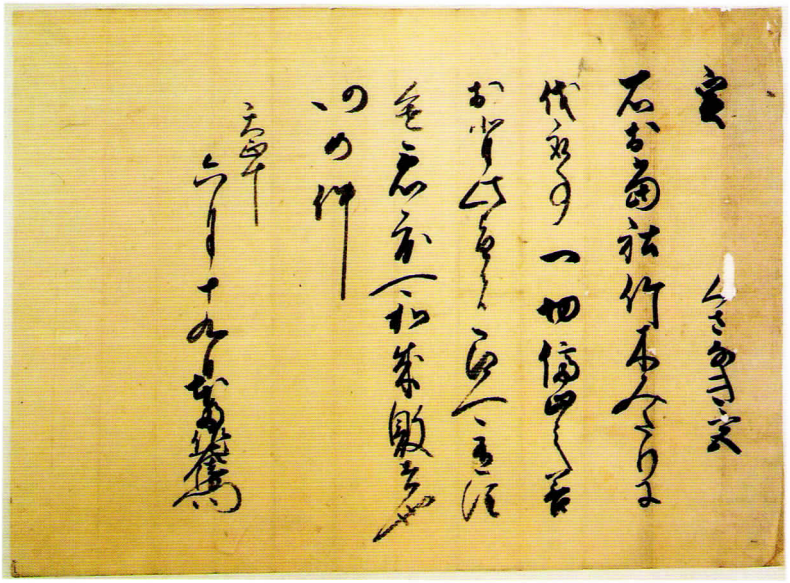
2-44　重次、於義伊の守役となる（福井県文書館保管松平文庫「国事叢記 一」所収）

家康の二男於義伊が生まれた天正２年（1574）前後、本多重次は於義伊の守役として世話をしていたという。家康は訳あってか於義伊に対面しなかったが、天正４年に長男信康が重次に相談し、親子の対面を果たしたとされる。家康は膝の上に於義伊を抱き上げ、丈夫に育ったことを喜んだと書かれている。

於義伊の出生については家康が岡崎在城の時、鷹狩りの帰りに浴室で務める湯取りの女性を懐妊させ重次が世話したという説や、お万（永見吉英の娘）が浜松城を出て本多広孝の伯母にあたる家で双子を出産した説などが記されている。

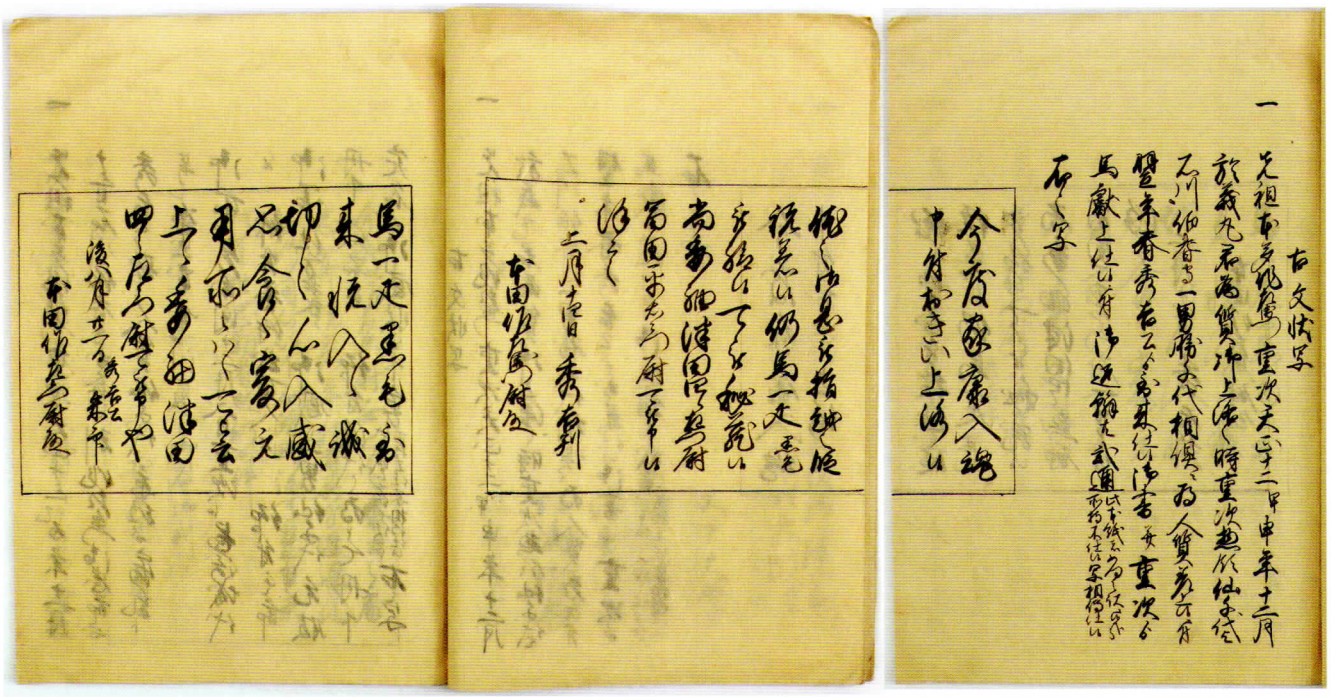
2-45　長篠の戦いでの奮戦（坂井市龍翔博物館蔵「宝暦八年三月 小臣家譜 一」所収）

天正３年（1575）５月、長篠の戦いにおいて、重次は敵の首を落とすも６、７騎に取り囲まれ、７か所負傷したとされる。また、「右ノ眼ヲ切ツブサル」とあり、重次は右目を失明した。味方縦横に敵を切り崩して散乱し、武田勝頼は敗軍したことなどが記されている。



2-46　天正10年６月19日　本多重次制札（国立公文書館蔵「徳川家判物并朱黒印」所収）

天正10年（1582）に武田氏が滅亡し、駿河は家康の所領となった。『寛永譜』には、重次は家康の命により江尻・久能（共に静岡市）の両城を守ることになったとある。この制札は重次により駿河有度郡（静岡市）にあった草薙宮（草薙神社）の竹木伐採を禁止したものである。この年、重次は遠江・駿河において制札や安堵状などの文書を出し、奉行人として務めていたことがうかがえる。

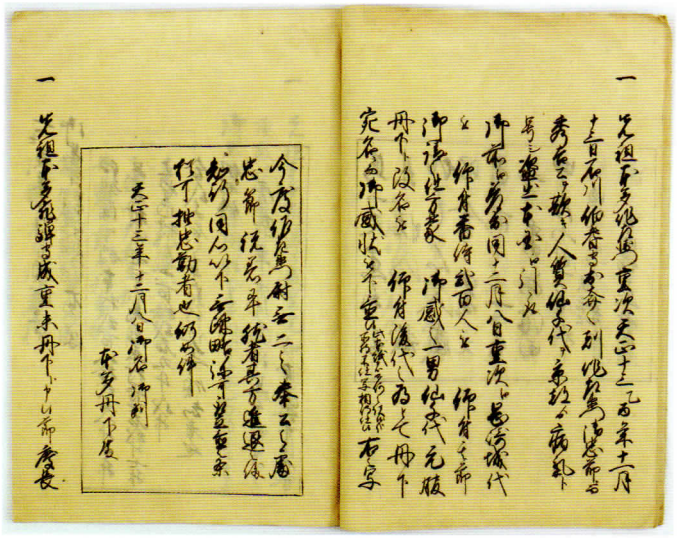


2-47　（天正13年）2月14日　豊臣秀吉判物写
（坂井市龍翔博物館蔵「寛政十一年十一月 先祖認置候軍功書・御感状・御黒印古文状 写」所収）

天正12年（1584）に家康から豊臣秀吉へ人質として於義伊と共に重次の子仙千代が上洛した。翌年、秀吉は重次に息子を差越したことを悦び黒毛馬１疋与えるとの書状である。これに対し重次は同じく黒毛馬を秀吉に贈り、秀吉より返書が出されている。これら原本は存在せず、このような写しのみが残る。

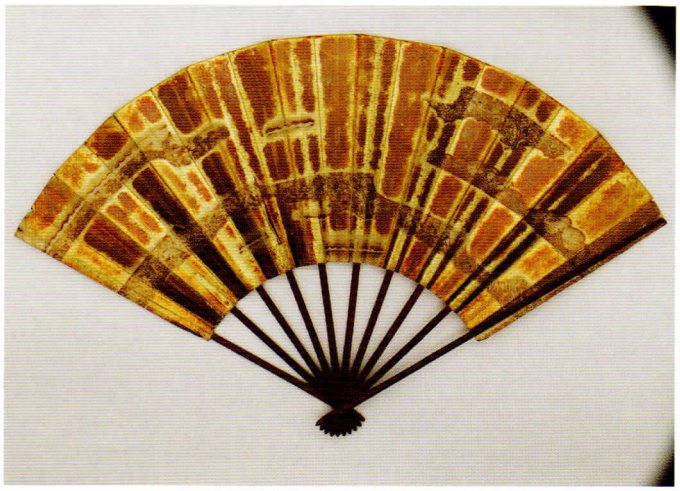
2-48　五之字四半之指物（本多重次所用）（取手市本願寺蔵）

本多重次所用と伝わる旗。白地に五の字と立葵をあしらっている。



2-49　仙千代を盗み出す（坂井市龍翔博物館蔵「寛政十一年十一月 先祖認置候軍功書・御感状・御黒印古文状 写」所収）

天正13年（1585）11月13日に岡崎にいた石川数正が秀吉方へ出奔した。対して重次は秀吉の人質於義伊に従って京にいた子仙千代を病気と称して盗み出し本国へ連れ帰った。家康はこれを賞して重次を岡崎城代としたと記されている。現在のところ重次が岡崎城代であったかは疑問とされる。また、仙千代の代わりに甥の富正を於義伊の付人にしたとされる。

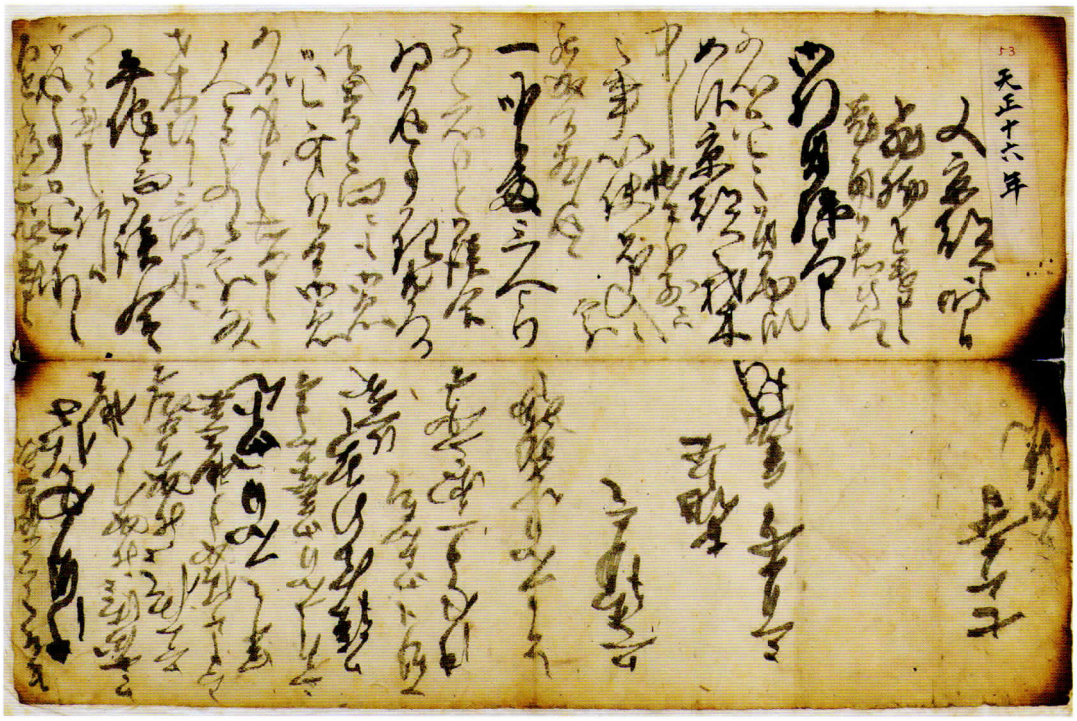


2-50　金扇子（取手市本願寺蔵）

家康から拝領したと伝わる金扇子。

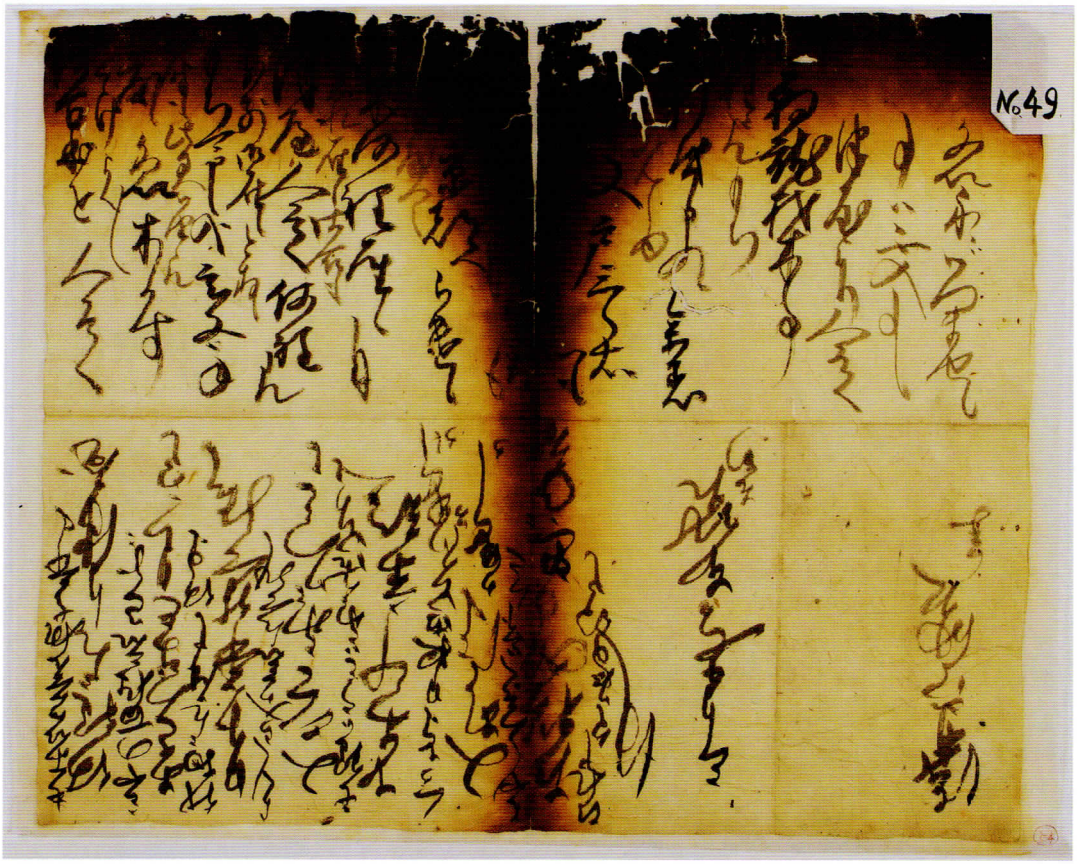
2-51　（天正13年）6月15日　本多重次書状写（岡崎市上宮寺蔵）

三河一向一揆で家康領国外退去となっていた寺院・坊主たちの赦免が七か寺を除いたため、その後七か寺赦免が石川家成の母で、家康の伯母にあたる妙春尼を通して進められていた。しかし本多重次から赦免されたと聞いたとして本證寺が領国内に入り荒川に道場を開いていることに対して、本山坊官下間頼廉に訴えた書状。重次本人は駿河湯本（湯山、静岡市）にいて、駿河国内の内政にかかわっていたと思われるが、三河でも真宗寺院の赦免を担当、あるいは当時は三河の奉行を担っていたと思われる。



2-52　（天正16年）3月17日　本多重次書状（岡崎市上宮寺蔵）

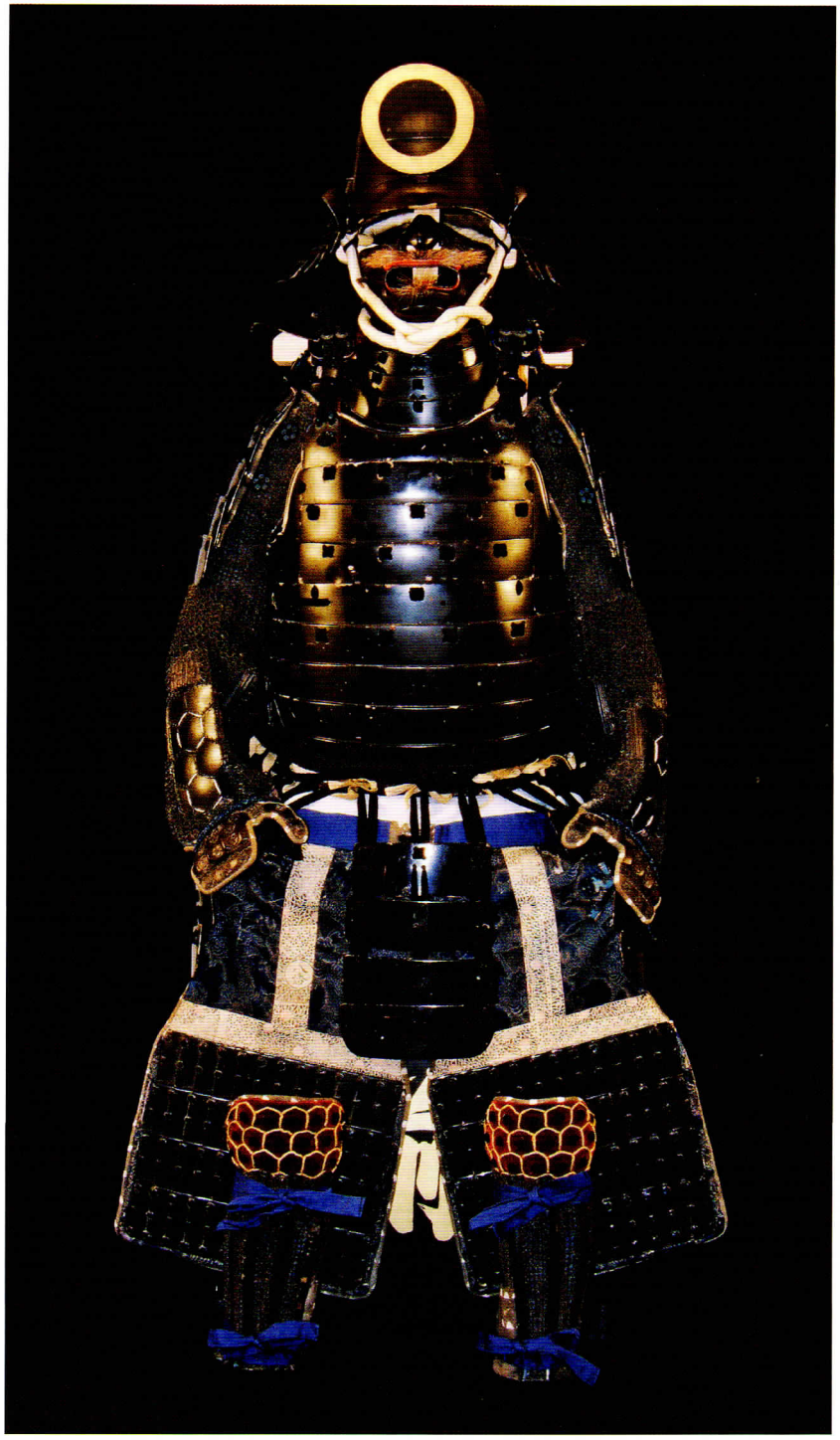
三河真宗の代表の七か寺が材木運搬を拒否すると重次に伝えたことに対して、再度石日（石川家成）と相談するよう求めた書状。すでに材木は船に積まれていて、竹は三河湾内の佐久島（西尾市）に届いているとしている。史料2－53とあわせてみると、重次は京への材木運搬の取締役的な立場であったと考えられる。



2-53　（天正16年）3月17日　本多重次書状案（岡崎市上宮寺蔵）

重次から家康家中の浅井六之助に対して京都へ送る材木の量や必要人員数などの状況を問い合わせた書状。戸田三郎右は戸田忠次のことで、おそらく大津（豊橋市老津）の領主で、「あさつま」は近江琵琶湖岸の湊の朝妻にあたる。浅井の運搬材木は豊川から三河湾・伊勢湾から船で木曾川に入り、陸路で関ヶ原を通り琵琶湖に至る行程であったろう。

前史料と関連し、真宗門徒の材木京上（京都への材木運搬）賦課問題で、重次の立場は運搬全体の担当者としての立場であったと考えられる。



2-54　【参考】黒漆塗越中頭形兜（本多重次所用）（取手市本願寺蔵）

作左衛門家の菩提寺である本願寺に伝わる重次所用とされる甲冑。

2-55　本多作左衛門重次墳墓（茨城県取手市台宿）

家康の関東移封後、重次は上総古井戸（千葉県君津市）に3000石で屏居（へいきょ）（隠居）を命じられたとされる。『寛政譜』ではその後、屏居先が下総相馬郡井野（茨城県取手市）に移され、文禄5年（1596）に68歳で死去したとされ、この地に葬られた。

第3章

要地への配備

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いに勝利し、同八年に征夷大将軍となった家康は江戸幕府を開いた。同十年には二代秀忠が将軍となったが、いまだ大坂城には豊臣秀頼が在城しており、豊臣恩顧の大名も存在していたことから、政権としては不安定であった。そのため、家康は大坂を包囲するために天下普請による築城を進め、畿内や東海道など要地へは譜代を配備した。本多一族も豊後守家の康重が三河岡崎（岡崎市）城主、伊奈本多家の康俊が三河西尾（西尾市）城主、本多忠勝が伊勢桑名（三重県桑名市）城主となった。同二十年の大坂夏の陣で豊臣秀頼が自害した後も、初期の譜代大名は頻繁に転封が行われたが、本多一族は、姫路（兵庫県姫路市）藩や膳所（大津市）藩、横須賀（静岡県掛川市）藩など交通の要所へ配備された。

大名とならなかった重次の作左衛門家も、関ヶ原の戦い後は重次の甥の富正が越前藩主結城秀康の家老として越前府中（福井県越前市）に入った。後に重次の子成重も秀康の子松平忠直の家老として丸岡城（福井県坂井市）を与えられ、後に丸岡藩四万石の藩主となった。

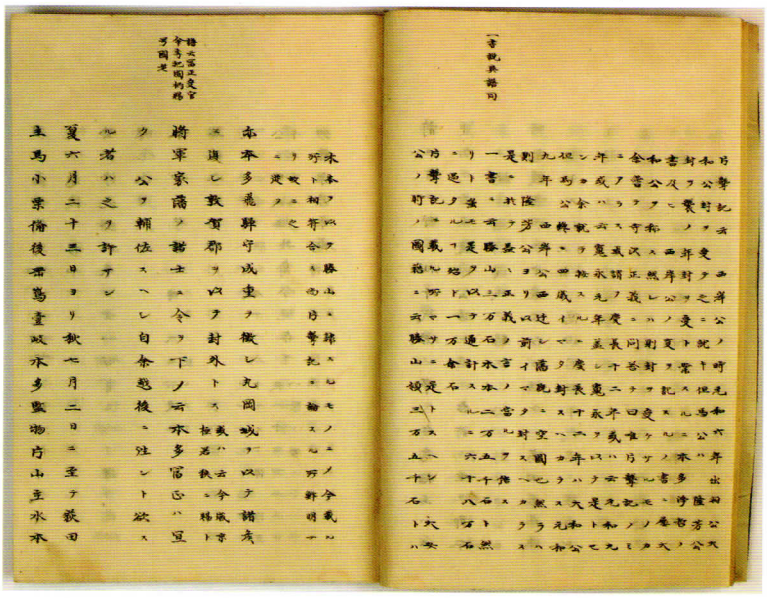
3-37　藤垣神社（福井県越前市本多）

藤垣神社は、元治元年（1864）に府中城内（館内）に初代富正をまつったことに始まる。明治維新後は本多家とともに東京に一時移ったが、明治15年（1882）に改めて旧館内に戻され、その時に城の佳名藤垣城にちなみ、藤垣神社とした。現在の社地は昭和7年（1932）に道路拡張等で移転した場所である。

3-36　本多富正墓所（福井県越前市龍泉寺境内）

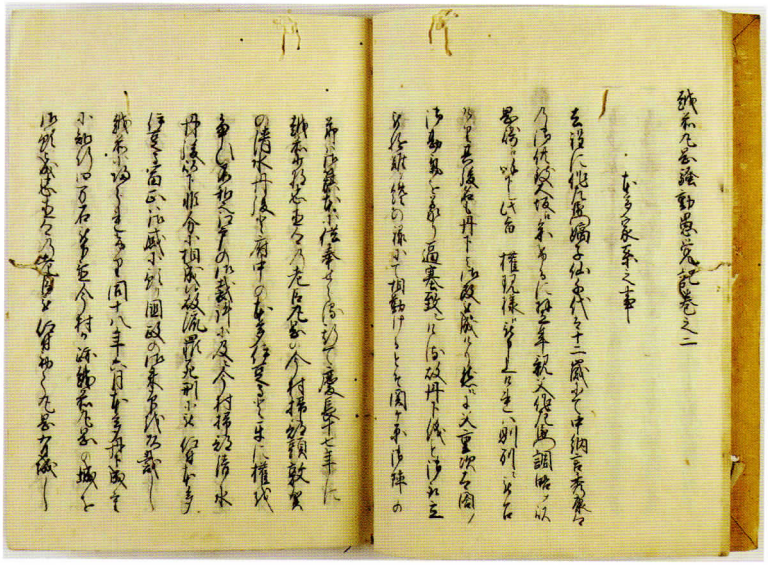
龍泉寺にある越前藩家老本多家の初代富正の墓所。龍泉寺は応安元年（1368）に通幻寂霊を招き越前国守藤原義清を根本檀越として創建された曹洞宗の古刹。慶長6年（1601）以降、本多家の菩提寺となり、本多一族の墓塔が現在も残っている。

丸岡藩主　成重



3-38　成重丸岡に封地を持つ（福井県文書館保管松平文庫「越藩史略四」所収）

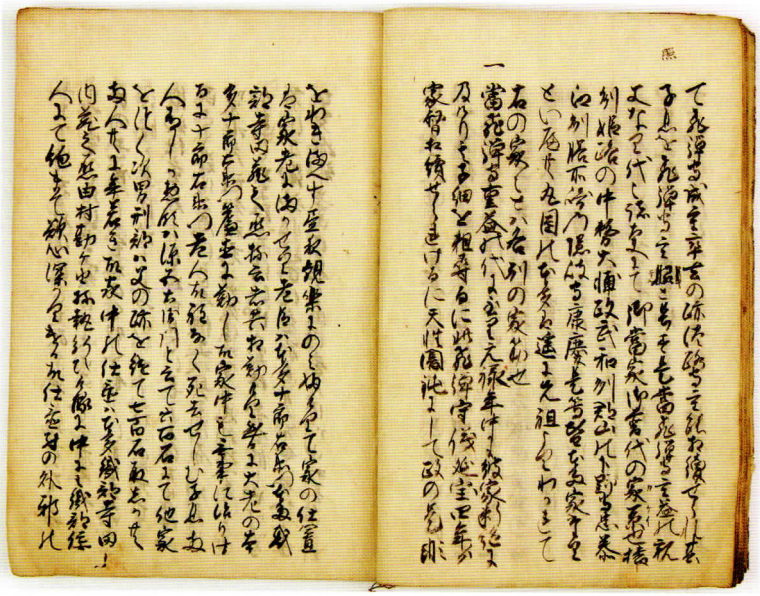
越前藩主松平忠直の改易後、成重は寛永元年（1624）に丸岡藩主となった。本史料には成重家臣の名が列挙されており、三河出身の家臣や本多氏も多くいたことがわかる。一方で、本多富正は福井藩主の輔弼（ほひつ）を求められ、福井藩家老として藩内に留まることとなった。



3-39　成重の事績（国立歴史民俗博物館蔵本多家資料「越前丸岡騒動愚覚記」所収）

「越前丸岡騒動愚覚記」は延宝４年（1676）の丸岡騒動に関する書であるが、前の部分に家祖といえる重次と成重の事績が収められている。

重次に比べ成重の事績の記述は少ないが、越前藩の家老として抜擢される前までは、父重次と豊臣秀吉との因縁により少禄であったことが書かれている。



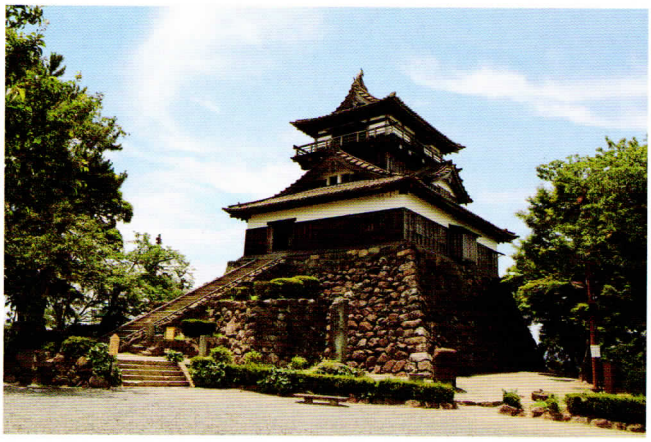
3-40　丸岡騒動（坂井市龍翔博物館蔵本多重方家文書「越前丸岡騒動愚覚記」所収）

成重の曾孫で丸岡藩の４代藩主重益の代に丸岡騒動といわれる御家騒動が起きた。重益は若くして跡を継いだが、「歓楽のみふけりて家の仕置は家老にまかせり」と藩政を顧みず、家老の本多織部に任せていた。そのため藩内は分列し、大騒動に発展し、この件に幕府が介入する事態となった。元禄８年（1695）に重益は改易され、織部親子は切腹の末、騒動は終結した。

本史料は成重系本多家の改易にいたる経緯が書かれている。

3-42　本多家歴代墓所（福井県坂井市本光院境内）

成重系本多家の菩提寺である本光院にある作左衛門家の墓所。重次、成重、重能、重昭の当主の五輪塔がある。本光院は正保４年（1647）の丸岡藩初代成重の没後、子の重能が創建した浄土宗寺院。元は現在の白道寺の寺地にあったが、本多家改易の後に有馬家が入封するとその菩提寺である白道寺に寺地を譲り、現在地に移った。



3-41　丸岡城（福井県坂井市丸岡町）

成重が慶長17年（1612）に起きた久世騒動で失脚した今村盛次に代わり入った丸岡城。笏谷石で作られた天守の石瓦が特徴であるが、建築当初は柿葺（こけらぶき）きだったとされる。現在、天守は成重が丸岡藩主となった寛永年間（1622～44）の頃に建てられたものとされ、近年では寛永５年頃ともいわれている。

昭和23年（1948）の福井地震で一度倒壊したが古材を用いて修復された。

参考文献

【著書・論文】

堀江登志実・湯谷翔悟『シリーズ藩物語 岡崎藩』 現代書館 二〇二二

本多隆成「初期徳川氏の奉行人―本多重次を中心に―」（『戦国期静岡の研究』）静岡県地域史研究会編・清文堂出版 二〇〇一

齊藤健治、太田次朗『悠久の土井』 二〇二三

福川一徳「豊後本多氏に係る二、三の史料について」（『臼杵史談』七四） 一九八三・一二

青山幹哉「中近世転換期の系図家たち」（『名古屋大学文学部研究論集』一三一 史学四四） 一九九八・三

仲田義正『池谷盈進著 現代語訳 田中藩史譚』共立印刷会社 一九九四

水谷令子「本多正信・正重の顕彰碑について」（安城市歴史博物館『研究紀要』二六） 二〇二二

【展覧会図録】

『本多作左衛門重次と子孫たち』取手市埋蔵文化財センター 二〇〇〇

『江戸時代の取手―相馬二万石と谷原三万石―』取手市埋蔵文化財センター 二〇〇八

『村のお殿様―取手を治めた旗本たち―』取手市埋蔵文化財センター 二〇一七

『徳川四天王 天下統一の立役者たち』岡崎市美術博物館 二〇〇六

『徳川四天王 本多忠勝と子孫たち ―岡崎藩主への軌跡―』岡崎市美術博物館 二〇一二

『本多家とその家臣団』三河武士のやかた家康館 一九九三

『武士とはなにか』 国立歴史民俗博物館 二〇一〇

『膳所城と藩政 築城から幕末十一烈士事件まで』大津市歴史博物館 二〇一八

『本多成重と丸岡藩』 みくに龍翔館 二〇一三

『特別展 元祖 豊川のブランドマーク⁉とよかわ紋・藩ワールド』豊川市桜ヶ丘ミュージアム 二〇二二

『特別展 家康の名参謀 本多正信』安城市歴史博物館 二〇一七

【自治体史・報告書・史料集ほか】

『新編岡崎市史 中世2』新編岡崎市史編さん委員会 一九八九

『新編岡崎市史 近世3』新編岡崎市史編さん委員会 一九九二

『新編岡崎市史 史料 古代中世6』新編岡崎市史編さん委員会 一九八三

『新編岡崎市史 美術工芸17』新編岡崎市史編さん委員会 一九八四

『越前市史 資料編4 本多富正関係文書』越前市 二〇一七

『藤枝市史 通史編下 近世・近現代』藤枝市 二〇一一

『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 二〇〇九

『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 二〇〇三

『愛知県史 資料編12 織豊2』愛知県 二〇〇七

『新編安城市史5 資料編 古代・中世』安城市 二〇〇四

『新編安城市史1 通史編 原始・古代・中世』安城市 二〇〇七

『田原町史 上巻』田原町、田原町教育委員会 一九八四

『小坂井町誌』小坂井町 一九七六

『小坂井町史 近世史料編 下巻』小坂井町 二〇〇四

『岡崎市史 第壱巻』岡崎市 一九二六

『岡崎市史 第弐巻』岡崎市 一九二六

『岡崎市史 第参巻』岡崎市 一九二七

『西尾町史 上巻』幡豆郡西尾町 一九三三

『たけふの文化財』武生市 一九九九

『わたしたちの町 土井 町誌』岡崎市土井町 二〇二〇

『嘉永年間 飯山藩士卒分限帳』総合学習センター飯山市ふるさと館 二〇〇九

■協力者・協力機関一覧（敬称略・五十音順）

青木眞美　赤堀敏彦　飯島章　五十嵐正也　石川敬子
入江隆亮　丑山直美　海野一徳　太田一夫　小幡早苗　礒部宏子
角明浩　工藤航平　工藤茂博　小中有子　鈴木航平　糟谷直毅
高橋大樹　辻本智子　長野栄俊　原田和彦　樋口明里　関初弥
堀澤良円　本多紀雄　本多裕江　南隆哲　森谷文子　堀江登志実
柳沢芙美子　山下葵　油井陽介　湯谷翔悟　安本翔音

糟目犬頭神社　上宮寺　浄土寺　膳所神社　撰要寺
総社大神宮　大乗寺　忠恩寺　東漸寺　徳本寺
南禅寺　藤垣神社　法音院　本願寺（取手市）
本光院　本證寺　摩訶耶寺　満性寺　龍泉寺

飯山市教育委員会　飯山市ふるさと館　臼杵市教育委員会
越前市教育委員会　越前市武生公会堂記念館　越前市中央図書館
越前松平家福井事務所　大津市歴史博物館　岡崎市役所
岡崎市美術博物館　掛川市役所　国立公文書館
国立歴史民俗博物館　坂井市龍翔博物館　佐久市教育委員会
膳所藩資料館　東京国立博物館　豊川市教育委員会
豊川市桜ヶ丘ミュージアム　取手市埋蔵文化財センター　長野市立博物館
西尾市岩瀬文庫　姫路市立城郭研究室　福井県文書館
藤枝市郷土博物館　三河武士のやかた家康館

特別展
安城譜代二　三河本多一族

発行日　令和五年九月十六日
編集・発行　安城市歴史博物館
指定管理者　安祥文化のさと地域運営共同体
〒四四六－〇〇二六
愛知県安城市安城町城堀三十番地
電話　〇五六六－七七－六六五五
印刷・製本　株式会社ジーピーセンター